とある引きこもりの学園生活。

高山直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある引きこもりの学園生活。

【Ｎコード】
Ｎ５２４６Ｕ

【作者名】
高山直

【あらすじ】
「俺は戦うよ。自由を得るために」唯里聖志、１７歳。藍染玩具店の商品である彼は、客の依頼で白無地学園に潜入することに。幼馴染や学園の生徒を巻き込んだ、血で血を洗う仁義無き戦いの物語が、今、幕を開ける。＊＊題名変えました。旧題「藍染玩具店」＊＊「流されながら自由に生きる、それが私のポリシーです。」と微妙にリンクしています。

序（前書き）

新連載です。
亀&不定期更新ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

序

私立白無地学園(しりつしろむじがくえん)。
歴史は古いのにやけに新築校舎のような輝きを放つ建物と、和と洋が入り交じった重厚な雰囲気の庭園。
それらを視界の端に留めながら、彼ーー唯島聖志(ゆいじませいし)はゆっくりと歩を進めていた。
否。
歩を進めていたという言い方には語弊があるかもしれない。
より正確に言うなれば、彼は引っ張られていた。
引きずられていた。

「美乃(みの)」

さすがにいくら緩くとはいえ首に絞めたネクタイを引っ張られって歩くというのは身体的にかなりの負担がかかり、目の前を歩く幼馴染に訴えてみる。

「首痛ぇ」

「お黙り」

瞬殺だった。
むしろネクタイを引っ張る力がより強くなったと感じるのは彼の思い過ごしだろうか。
作戦変更。

「……美乃さん？ちょっと、あの、これは、かなり、キツイんですが…？

……できればその手を離して俺の半径一キロメートル以内に近づかないで。切に」

下手に出てみた。

ばっ。

そんな音が聞こえるくらいの勢いで彼に向き直る幼馴染。

ぐいっとネクタイを引っ張られ、思わず前屈みになり、頭一つは下にある美乃と強制的に視線を合わせられる。

「……どの口がそれを言う……？」

地を這うような声に、彼は地雷を踏んだことに気づき、引きつった笑みを浮かべる。

が、時既に遅し。

「ーーっあんたが駄々こねて駄々こねて駄々こねて高校行きたくないとかほざいたから私がお目付役として一緒に行動させられてんでしょうがっ！私は転校なんか、したくなかったわよっ！！！今だって私があんた放したらこのまま全力で逃走する気満々のクセにいいいっ！被害者ぶって語ってんじゃないわっっっ！私に文句言う権利は多分にあるけどあんたには皆無よこんの引きこもりがあああああっ！！！！！」

雲一つ無い青い空いっぱいに、幼馴染の絶叫が響き渡った。

＊＊＊

２０ＸＸ年、日本――

黒染（くろぞめ）、葡萄染（えびぞめ）、薄墨（うすずみ）、鈍（にび）、青鈍（あおにび）、二藍（ふたあい）、浅黄（あさぎ）、青丹（あおに）、縹（はなだ）、紫苑（しおん）、青朽葉（おくちば）、萌黄（もえぎ）、菅草（かんぞう）、蘇芳（すおう）、梔子（くちなし）、山吹（やまぶき）、朽葉（くちば）、檜皮（ひわだ）、紅梅（こうばい）。

やけに古めかしいこれらの氏を持つ者達を総称し「一九族（いっくぞく）」と呼ぶ。

彼らは政治、金融、軍部、司法、ありとあらゆる権力の中枢に強大な力を誇る。

ゆえに、一九族の一つでも欠けることになれば、日本は大混乱に陥るであろう事は、裏の世界の者も表の世界の者も大人から子供まで誰もが理解しているであろう”常識”であった。

一九族こそが人類（われら）のルール。

そんな至高の存在が、一九族なのである。

しかし。

それでもその微妙な均衡を崩し、権力を握りたいと考える者はいる。

今の地位に上り詰めるまでありとあらゆる方法をとってきた一九族を恨む者もいる。

またそのどちらでもない理由から反旗を翻す者もいる。

それは一九族の外だけでなく内からも。

いくら頑強な城であっても。

地盤が脆くては意味がない。

ーーそれが一九族の実態であった。

（うっわ、権力なんて握るモンじゃないね。あー僕一般庶民で良かったー）

これが一九族の話を初めて聞いた時の唯里聖志の感想である。
この発言は彼がまだ純粋で純朴な五歳の時のものであるが、それから１２年たった今、彼に同じ事を問えば、おそらく後半部分は消えた答えが返ってくるだろう。
何故なら彼は、”一般庶民”と名乗るには、いささか常識からはずれた環境に身を置いているから。

唯里聖志、１７歳。引きこもり。
趣味：特になし。　特技：ハッキング。
藍染玩具店、商品ナンバー００４”ハッカー”。
またの名を、”舞台裏（オフステージ・ディクテーター）の独裁者”。

これは、生々しく、血生臭く、荒々しく、猛々しく、女々しく、醜怪で、醜悪で、偽善的で、偽悪的で、懐疑的で、猜疑的で、蠱惑的な世界へ、挑発的に、高飛車に、笑みを浮かべて挑戦状を叩き付けた、一人の少年の物語である。

第1話（前書き）

同時進行の連載小説で、題名付けに毎回もの凄く頭を悩ませているので、今作は開き直って数字でいきます。

第1話

『うるさいよ。ギャーギャー喚く暇があったら私の肩でも揉んでくれ。騒音で迷惑掛けることもなし、私からも感謝され、良いことづくしだ』

『はぁ？死にたい？勝手になさい。でも少年、君への貸し、全額利子つけて耳をそろえて私に返してからにしてくれよ』

『えーいぐだぐだ悩むな少年！なんか今が一番最悪とか思ってるかもしれないけど気のせいだ気のせい。その内なんか良いことあるさ』

怒っていた時も、迷惑そうにしていた時も。

いつも笑顔だった彼女が笑わなくなったのは、いつからだったのだろう。

＊＊＊

オーナーからその話を聞いたときは、嘘だろうと思った。

そんな俺の顔を見て爆笑した、あの腐れ外道の目を見てそれが真実だと理解した。

だが理解と納得は別物である。

「…なんで俺なんです」

「自分でも解ってるコト聞くなよ聖志クン☆」

俺の小さな抵抗は語尾に星付き台詞のふざけた一撃であっさり撃沈した。

「…その依頼主頭おかしいんじゃないですか。世界ぶっ壊す気かよ」

「コラコラ駄目だゾ聖志クン♪依頼主じゃなくてお客サマだゾ。悪口厳禁☆」

でも正直それくらいボヤかせてくれても良いと思う。
こんな依頼、する方も受諾する方も絶対変態だ。
生命活動に必要なＲＮＡの一部が変質した生態の人間だ。いや人間ですらねぇ。

「失礼だなっ！私は変態じゃなくて変人だゾ★」

「自分で言ってりゃ世話ねぇな」

つか俺声に出してなかったぞ？というつっこみは、この人の前では今更だろう。
やっぱり変態である。

「聖兄（せいにい）」

オーナーの部屋を出て廊下を歩いていると、そんな呼び声と共にトテトテと足音が近づいてきた。
俺を聖兄と呼ぶのは一人しかいない。

「何？倫子（りんこ）ちゃん」

振り返った先には予想通りの姿。
金髪碧眼、フリルの付いた淡い赤のワンピースを着た少女ーー桃宮(ももみ)
倫子(やりんこ)は俺から数歩離れた場所で立ち止まった。
沈黙。
……倫子ちゃん？何故睨むのかな？

「聖兄と目と目で会話しようと試みていました」

普通に無理だろ。
倫子ちゃん、目は口ほどにものを言うって言葉は嘘なんだよ？

「……聖兄、受けるんですか？依頼」

長い沈黙の末言われた言葉。

「…情報早いね倫子ちゃん。俺さっき聞いたばっかなんだけど」

それは意外すぎるものだった。
オーナーの部屋を盗聴していたかと思うほどの速さだぞ？

「髪結さんにはバレてました」

してたのかよっ！
ちなみに髪結さんとはオーナーの事だ。

「で、どうなんですか」

そう言ってヒタと俺を見据える。
身長１２０センチの倫子ちゃんには、１８０近い俺と目を合わせる

のは、いくら離れた位置での会話でも至難の技だろう。
そう判断し、急に近づいてきた俺を訝る様に見上げる倫子ちゃんを抱き上げた。

「うわぅっ」

目を白黒させる倫子ちゃん。

「受けるよ」

一気に焦点が定まり、俺を静かに見つめる。

「もう決めたことだからね。それに俺に拒否権はないし」

赤い唇をかみ、今にも泣きそうな表情で。

「俺が留守の間、いい子にしてるんだよ」

ぎゅっと俺にしがみつく彼女に、それ以上掛ける言葉が見つからなかった。

＊＊＊

藍染玩具店。
それが彼の勤め先であり居場所である。
そこはただの玩具店ではない。

玩具(おもちゃ)と称し、人間を貸し出す店である。
もちろん、客も商品も”ただ者”ではない。
某大手メーカーがライバル会社を潰す為に”破壊魔(クラッシャー)”を買う。
政府の人間がある国の要人を始末する為に”暗殺者(アサシン)”を買う。
この店ではそんな事が日常茶飯事である。

そして、今回の客の指名は”ハッカー”
依頼内容は、一九族の一角、”薄墨”の次期宗主、薄墨(うすずみ)あげはの殺害だった。

第2話（前書き）

わぁおホントに亀更新。
毎日更新してる方、超リスペクトな今日この頃です。

第2話

『少年、人生はあきらめと開き直りが大切なんだよ』
『奇跡？そんなもんに頼れるのはやれる事全部やってもう打つ手なしって時だけだ。何もしないうちから頼っちゃ駄目だろう』
『あははは！癇癪起こして許されるのは三歳児までだよ。あとは失恋した女子かな』
男はダメなの？と聞いた俺に、彼女は笑って肯定した。

＊＊＊

「馬鹿、アホ、引き篭もり、ネット中毒、中学の成績オール1、考えなし、迷惑野郎」
今俺は、目の前を歩く幼馴染に罵詈雑言浴びせられている。
「ヘタレ、ドM、彼女いない歴＝年齢（イコール）」
「おい待て今のは否定するぞ！」
「全部真実でしょう」
即答。

おいおい美乃さん？君はそういう目で俺を見てきたのかい？

「ーっありえねぇ！俺っていうクールなキャラを全否定するワードの数々！俺はヘタレでもドMでもねぇ！それは久遠（くおん）さんの専売特許だ！」

「彼女いないのは否定しないのね」

ぐはぁ。

こ……こいつ…。いくら真実でも言って良い事と悪い事はあるでしょうがっ！

17歳の男にその台詞は禁句だぞ！

「それに久遠はまごうことなきM気質だけど、ヘタレじゃないわ。どっちかっていうとそれは安西の方じゃない？」

「あー…確かに」

「……ちょっと安西本っ当に変わってないの？私がいなかった二年で全くっていって言い程？あいつもう26じゃなかったっけ」

「おーむしろ磨きが掛かってる」

「…マイナス方面に成長してどうすんのよ……」

助かったぜ安西さん。

俺への非難を忘れて目の前で脱力している幼馴染に一安心し、俺は心の中で同じ藍染玩具の先輩詐欺師に感謝を捧げた。

俺が美乃に非難されているのには理由(ワケ)がある。
それは今回の依頼に深く起因していた。

事の起こりは今朝――

「ハイ。聖志クン。しっかり働いてきてネ★」

そんなふざけた言葉と共に渡された物。
それは。

「……え？ちょ、なんでブレザー？」

黒を基調とした制服一式だった。

「何でって、そんな君の反応にナンデ？だヨ☆
薄墨あげはチャンは全寮制の学校(ガッコ)に通ってるんだから、君もそこに潜入しないとダメだろ？」

「……全寮制…？」

「そう☆白無地学園３ーC在籍。君の１コ上の先輩だゾ」

いやそれは知ってる。成績優秀スポーツ万能人望ある１８歳。
…いやでも、全寮制…？まじ……？俺に高校行けと…？

「あれぇ、もしかして聖志クン。普通(フツー)の学校(ガッコ)だと思ってたのカナ？」

おい何でテメェいきなり目ぇ輝かせてんだよ。

「あーじゃあガッコ帰り狙おうとしてたんだねぇ★残ー念ーでーしたー☆それはムリだゾ。聖志クンも入学し・な・い・と★」

くそお前今滅茶苦茶うれしそうだなこの変態鬼畜野郎。

「ちゃーんとお姫サマ(倫子ちゃん)にお別れ言っとくんだヨ☆」

そうか……それでか倫子ちゃん。

少しいなくなるだけでなんでそんな寂しそうにするんだって不思議だったんだが、謎が解けたよ。

学校内じゃ仕事しづらいしな。絶対長引くよな。しかも寮生活じゃしばらく会えないよな。

……冗談じゃねぇ。

「旅に出ます」

宣言と同時に踵を返す。

「ヤレヤレ☆困ったコだなぁ」

後ろからそんな呟きが聞こえた。

結論から述べよう。

俺の逃走劇は三秒で終わった。

バンっ。

「さぁ行くわよ聖志。…つべこべ言わずにさっさと着ろ」

ドアを力強く開けた先には氷の微笑で制服を一瞥する一人の姿。
葉琴美乃ーー幼馴染との二年ぶりの再会だった。

＊＊＊

そして冒頭に至る。

怒りを大爆発させ俺にネチネチ文句を言い職員室に向かって歩く幼馴染の後をタラタラついていく俺。いまだにネクタイから手を放してくれない。
つかオーナーもさー。俺が逃げんの予想して見張り付けんのは分かるけど、なんで美乃？他の奴に頼めよ。美乃じゃ絶対逃げられないじゃん俺。そうかだからか。

「あんたのせいで私のほのぼの女子高生ライフは終わりを告げたわ」

あー、そーいや美乃はどっかの金持ち夫婦に孫として買われたんだっけ。

「めずらしく犯罪じゃない依頼だったのに。普通の女子高生としてエンジョイできてたのに。契約期間はまだ三ヶ月先だったのに。オーナーからあんたのこと言われた直後になんかタイミング悪く不幸な事故で私を買ったお客さんが死んじゃったからここに来る羽目になったのよ！」

”不幸な事故”……ねぇ。
お互いわかっているが何も言わない。

オーナーに文句を言える奴なんていないのだから。

「うぅ……私は別に買われたワケじゃないのに…」

それ以外の文句は多々あるらしいが。

ー葉琴美乃（はごとみの）。彼女もまた藍染玩具店の商品である。
商品ナンバー００１、”掃除屋”別名”紅の皇女（ブラッド・エンペラー）”

彼女はぶつぶつぶつぶつぶつぶつ文句を言っていたが、やがて（やっと！）ふっと溜息をついて口を閉じた。
そして苦笑する。

「……ま、どうせ逃げられないんだし、さっさと終わらせてさっさと帰るか。聖志」

私達は、どう足掻いても籠の鳥だしね。

そんな呟きが、風に乗って聞こえた。

第2話（後書き）

うーん。話がとびとびで何のこっちゃって方、すみません…。

私も書いててあれ？っと思った数数知れず。

題3話（前書き）

久々の投稿。

……見捨てないでください。

題3話

『ところで少年、君の名前は何というんだい？』
―今更だね。
『そう言うなよ。出会って一ヶ月なんて初対面と変わらんさ』
―そうかなぁ。
『そうだよ。ふむ、では私から名乗ろう。私は―――』

＊＊＊

「葉琴美乃です。よろしくお願いします」

「唯里聖志。よろしく」

別によろしくしなくていいけどな…と思いながら、クラスを見渡す。
―――二人に突き刺さる視線。
好奇心。無関心。嫌悪感丸出しなものや、探るようなものまである。

（あーあ）

予想はしていたが、思った以上に今回の仕事は難しいものになりそうだった。

＊＊＊

職員室までの道すがら、いくつか美乃に忠告されたことがある。

「あんた、白無地学園がどんなとこか知ってる？」

「全然」

溜息が返ってきた。

「……白無地は唯一一九族が支配できていない学校なの。だから各家は一門の優秀な人間を送り込んで、実験を握ろうとしている。でも職員として入り込もうとしても、学長の平等院律子（びょうどういんりつこ）に阻止されるから、生徒として送り込むの。学長は生徒ならどんな立場の人間でも受け入れるから。

つまり、学園内には、各一族の未来を担うであろうエリート達が盛りだくさんなわけ。生徒名簿見ればわかるけど、明らかに他の学校と比べて一九族ゆかりの名前が多いわ」

「……ふーん。でも何で一九族はこの学校を支配したいんだ？」

「…考えてもみなさいよ。この国に一九族の息のかからない場所がある？」

「…あー……我らが藍染玩具と同業者達くらいか？縹葉（はなだば）は除くとして」

「そう。私達は例外として、一介の学校が一九族から独立しているなんて、普通に考えてありえない。つまり、今まで一九族の支配を逃れてこれた何かがこの学園にはあるってこと。そしてその何かに関することを一九族は狙ってるってことよ」

「……はぁ、壮大だな。でも俺らには関係ないだろ」

「大ありだ馬鹿者。今回のターゲットはその一九族の一人よ？しかも次期宗主。彼女もその何かを狙って白文字にいるに決まってんじゃない。その彼女を狙う以上、私達もその何かに関わらざるを得ないでしょうが」

「……成程。つか美乃よくそこまで頭がまわるな。しかもそんな知識どこで手に入れたんだ？」

「情報は雨傘ちゃんからもらったの。それと、私の頭がまわるんじゃなくて、あんたが頭使ってないだけ」

「ひでぇ」

「事実でしょう。…それはともかく、私が言いたいのは、そういうスーパーエリート達がうじゃうじゃいる所なんだから、不自然な行動とったら即目を付けられる可能性が高いってこと。だから今回の仕事は一に慎重二に度胸、三四がなくて五に運しだいってとこね」

「……美乃さんにしては投げやりな言い様ですねぇ」

「当たり前でしょ。今回の仕事内容ありえないし。遠回しに死んでこいって言われてる様なもんだし。マジないわぁ。…はぁ、憂鬱。でもほら、無茶な依頼、私達いくつもこなしてきたじゃない。なんとかなるかなって。…それにあんたの仕事だから正直私あんまやる気ないし、あんたがドジって失敗したら私はさっさとずらかろーって軽い気持ちだし」

てめぇ最後が本音だな。

「まぁでも慎重にやるに越したことはないわよ。……はい、着いた」

「お。君達が編入生だね。俺は担任の金佐賀（かなさが）だ。よろしく」

職員室の前で俺達を待っていたであろう３０そこそこの男の声を合図に、俺達は外行きの笑顔を浮かべた。

＊＊＊

「ねぇねぇ葉琴さんと唯里君って知り合いなの？」

「きゃー葉琴さんって肌超キレイ。どこの化粧水使ってるの？」

「唯里君、わからない事あったら何でも聞いて！私が教えてあげるからっ」

「あっずるい私が教えてあげるぅ」

姦しい。

ＨＲが終わった途端、俺らの周りを囲んだ女子数名。

彼女達は、さっき好奇心一杯に俺らのことを見ていたグループだから、無害だとは思うのだが、別の意味で疲れる。

にこやかに隣で受け答えしてる美乃を素直に尊敬する。

「うーんでも珍しいよねー。二人も転校生が来るなんて。しかも同じクラスに」

「それはあれでしょ？このクラスの二人が転校しちゃって空きができたからでしょ？」

――転校ね。
ちらっと美乃を見るが無視された。
チャイム音。

「おーいお前ら席着けよー」

教師の声を嬉しいと思ったのは初めてだった。

「だから嫌なんだ……」

1～3限もＨＲ後と全く同じ事を繰り返した俺は、４限終了と同時に教室を飛び出した。
窓から。
後ろから美乃の『裏切り者っ』という視線をビシビシ感じたが、無視だ無視。
窓からといっても一階なのでなんの問題もない。

「はぁ」

溜息をつく。
本当に俺大丈夫だろうか。いや無理だ。俺に学校生活はおくれねぇ。
これはマジで早く仕事を片付けないとヤバイ色々。主に俺の精神的に。
つらつら考えながら歩く。
今は昼休みなので、そこかしこで昼飯を食ってる人影が見えるが、

食に淡白で、普段ビタミン剤と栄養ドリンクで生活している聖志は、別段お腹が空いているわけではないので散策を続けることにした。そして歩くこと１０分―――。

（あー…これは……認めるのは非常に不本意だが、世に言う迷子というやつ…？）

唯里聖志は道に迷っていた。

白無地学園の侵入者対策のための無茶苦茶な設計のせいもあるが、これは普段家に籠もっていて外出する機会がもの凄く少なく、位置把握能力が三歳児以下の聖志の性質によるものが原因の多くを占めている。

仮に美乃だったらこんな事にはならなかっただろう。

（……うーん…どうするか）

残念なことに周囲に人の気配がない。来た道を戻るも、途中で道が四股に分かれていたところで挫折した。

（…これはマジでやばいかもしれねぇ）

携帯は教室。つまり連絡手段はゼロ。

聖志の脳内に、『悲劇！校内で道に迷い遭難死』という見出しの新聞が浮かぶ。

（か、かっこ悪っ。うわぁ絶対嫌だ）

不吉な想像（イメージ）を振り払おうと、頭を振った聖志の目に、ふと、周りの木がとびこんできた。

「はじめからこーすりゃ良かった」

辺りの木で一番高い木に登りながら、聖志は呟いた。
上から見りゃ方向なんて一目瞭然。つかなんで今まで気づかなかった俺。ウロウロ無意味に歩き回って余計な体力使ったじゃねーかよ。
ヒラリと枝の上に立つ。

「…っと、ん？んんー？おおー見える見える。あっちか」

そして木から降りようと視線を地面に向けた時。

「――えっと……はじめまして？」

地上で目をまん丸に見開き自分を凝視する女子生徒に、とりあえずへらっと笑ってみた。

題3話（後書き）

はい、学園に潜入完了です。
が、ターゲットと接触するのはもうしばらくお待ち下さい。
最後の女生徒はあげはさんじゃありません。

題４話（前書き）

短っ。

題4話

『女の魅力って何だと思う？』
―また唐突だね。
『別にいいだろ。で、何だと思う？』
―顔の可愛さとスタイルの良さ。
『最低だな』
―と、犬飼(いぬかい)兄さんが言っておられました。
『五歳児に何ふきこんでんだあいつ』

後日、日頃から俺に飴やら何やらを色々くれていたお兄さんの顔に、綺麗な手形が付いていた。

＊＊＊

「へぇ、転校生なの。私、神薙緑華(かんなぎりょっか)。君より1コ上。よろしく」

とりあえず木を降りて自己紹介すると、そんな言葉が返ってきた。ウェーブのかかった茶髪を指にくるくる巻き付けながら、さっきの驚きの表情とは一転、実に楽しそうな表情で俺を見る。

「で、何で木登り？」

う…と言葉に詰まると、さらに顔を輝かせながら爆弾を落とした。

「もしかして、道に迷って帰り道分からなくなってどうしようと黙

考した後近くの木が目に入りそうだ上から探せばいいじゃんと思い至って実行したクチ？」

「エスパーっ？」

おもわず力一杯叫んでしまった。
その反応に大爆笑の先輩。

「――あはははっ！わー久々に笑った。やだ君最高。まさかホントにそうだったとは。そんなストイックな顔して何その間抜けな行動…っ」

木にばんばん手を叩きながら笑ってる。超笑ってる。
――知らなかった。人間笑われすぎるともの凄く馬鹿にされてる気分になるんだな。

「……そういう神薙先輩だって、顔と行動合ってませんよ」

ささやかな反撃に出てみた。

「んー？それはアレかな？見ため派手なチャラ系美女なのに、そんな大口開けてバカ笑いするなってことかな？」

「やっぱエスパーっ！？」

つーか美女って自分で言ったよこの人。否定しないけど。

「あ、あはははっ……！」

どうやらまた笑いを提供してしまったらしく、先輩はヒーヒー涙目

で木を叩いていた。

「さすがに笑い過ぎじゃないですか？」

「いやごめん。本当ごめん。もう君の存在がツボりすぎて」

「それ貶してますよね。謝りながら貶してますよね」

「気にしない気にしない」

俺とこの賑やかな先輩は、連れだって校舎に向かっていた。

「いやー、それにしても面白いね、君」

「初めて言われましたよ」

「君の周囲にも面白い人が集まりそうだなぁ。退屈しなそう」

聞いちゃいねぇ。

「人生は楽しくなくっちゃ。だから面白い事大好きよ、私。つまり君もね」

「それはどうも」

「んふふ♪君ってほんと最高。大好きよー聖志くん！」

すげぇ。美女に好きって言われてここまで嫌な気持ちになったの初

めてだ。いや、好きと言われたのも初めてだが。

「あー、最近つまんない事ばっかだったから、この出会いに感謝感謝。神は私を見放さなかったのね。毎朝太陽に向かって拝んだ甲斐があったわぁ。あの退屈な生活があと三日も続いてたら発狂してたもん確実に」

どんだけ快楽主義なんだこの人は。

「あ、そうそう。君ってさ、第一印象を見事なまでに裏切るキャラだねってよく言われない？」

「先輩にだけは言われたくありません」

「それは質問の答えにはなってないよね。さりげなく誤魔化したって事は図星？」

…え、詐欺じゃん。この流れで鋭さを発揮しますか先輩。

「この場合沈黙は肯定と同義だよ。というかそんな隠す事じゃないでしょうに」

「俺は正体不明（ミステリアス）が売りなので」

「知らんがな」

でも何にしろ最終的には軽口のやりとりになるんだな。

――そんな感じでゆるーい会話をしながら歩き続けていると、ふと先輩が立ち止まった。

「うーん、名残惜しいけど、この辺で失礼するね」

「え？でも校舎はまだ先ですよ？」

俺達の視線の先には堂々とそびえ立つ校舎。の、一部。

昇降口まではまだ少しある。

「私はちょっと野暮用が」

にこっ。

キラキラ度２０％増し（当社比）のアルカイックスマイルで言われちゃそれ以上突っ込めないでしょう。いねーよそんな勇者。

「……そうですか」

この分じゃ何であの場所にいたかも教えてくれなさそうだな。

あの辺なんも無かったし、他の生徒の姿も皆無だったから気になってたんだが。

「私は秘密主義（ミステリアス）が売りなんで」

「知らんがな」

あはははっとまたひとしきり大笑いした後、神薙先輩は去っていった。

……よく分からない人だ。

題４話（後書き）

聖志君は別につっこみ属性なわけではありません。

ただ単につっこまれる様な言動をする人が周りに多いだけです↑

題5話（前書き）

お久しぶりです…。全然更新出来ません…。

題5話

『女って怖いよな』
ーしみじみと何言ってんの。
『いやいや、怖いって本当。最近あーちゃん見てて特にそう思う』
ー……レ、麗華姉サンハ怖クナイヨ。全然。ムシロ優シイヨ。
『…君も苦労してるんだな…。あーちゃん以上に怖い女はそうそういないだろう』
ー…そんな事言ってると、また麗華姉さんに怒られるよ。
うん、女って怖いよ、ホントにね。

＊＊＊

教室に戻った俺を出迎えたのは、美乃の絶対零度の視線だった。
にこっ。
そして氷のごとく冷ややかな表情のまま口角を上げる。
「ここに来て初めての昼休み。有意義に過ごせた？」
ー私をおいて一人逃げるとはイイ度胸ねぇ。で？この貴重な時間を使って学校の調査くらい勿論してるわよねぇ？
美乃の背後にドス黒い何かが見える。カオスな何かが。

「…は、はは。いや、特にこれと言って特筆すべき点はありませんねぇ」

ーすんません何もしてきませんでした。

にこぉぉっ。

ちょ…美乃さん……？そ、そんな人間の口の限界に挑戦みたいに笑わなくても。裂ける裂ける裂ける。や、マジ裂けますってそれ以上は。

「聖志。後でちょっといい？」

ー逃げんなよ。

「……おう」

俺は素直に頷いた。

＊＊＊

「おーい。葉琴、唯里、ちょっと来い」

今日の全ての授業が終わったところで、担任に呼ばれた。

朝の女子達は、午後の授業の合間もキャイキャイ騒ぎ、まさに今この時も俺達に話しかけようとする動きを見せていたから正直この呼び出しは有り難い。

美乃と一緒に金佐賀の後をついて歩くと、担任はおもむろに煙草を取り出し、ふぅ…と何やら哀愁漂う風情でしみじみと呟いた。

「…面倒くせぇ」

…駄目だろコイツ。

こんないかにもダリーやってらんねーって面と態度の教師見たの初めてだ。

初対面では普通の奴（センセー）に見えたのに。第一印象って当てになんねーなー。

「金佐賀先生、校内は禁煙ですよ」

美乃！突っ込むとこはそこなのか！確かに大切だけど！

「るせー。生徒が教師に口出しすんな。俺に命令出来るのは俺だけだ」

うわっいいのか現役教師。ＰＴＡとか教育委員会とか敵に回す台詞だぜそれ。

あー、っとにだりぃ…と文句を言う担任を、改めて眺めてみる。

一昔前に話題になったらしい草食系男子の正反対のタイプ。

野性的で渋い大人の魅力全開の雰囲気だ。

…あ、なんか似たような人知ってるかも。

「唯里ー。俺は男から熱い視線を貰っても嬉しくねーぞ。言いたい事あるなら言えや」

振り向きもせずそんな事を言う。あんた後ろに目ぇついてんのかよ。

「いや…別に…。俺らが呼び出された理由って何なのか考えてただけです」

まぁ転校初日に担任に呼び出される用件なんて大体想像つくけどな。
「んあ？あー、そうだった。……ま、ここまで来りゃ大丈夫だろ
…おい、唯里、葉琴」
あくまでもこちらを振り向くことなく淡々と。
「お前ら藍染玩具の人間だろ？」
目の前の男は爆弾を落とした。

「はい。よくご存じですね」
隣から聞こえた声にぎょっとする。
美乃が表情を変えることなく頷いていた。
コツ。
金佐賀の足が止まった。
「…否定しねぇんだな」
そしてゆっくり振り返り、俺達に向き直る。
自然体そのままの美乃を一瞥し、ちらりと俺にも視線走らせ、煙草を苦々しそうに噛む。
「だって、”藍染玩具の人間なんだろう”って言われて、違いますって答えたって信じてもらえないじゃないですか。根拠が有るから

こそ断定口調だったんでしょうに」

「カマ掛けたとは思わねぇのか？」

「カマ掛けるにしたってやっぱ根拠がいるんですよ。否定して半端に警戒されるよりは、別に疚しい事が有るわけではないので、堂々としてた方が気が楽ってものです」

女生徒殺害目的で入学した美乃は、爽やかな笑顔で言い切った。

「園梨（そのなし）みてぇな奴だな…」

更に苦い顔になり、そう吐き捨てる金佐賀。

園梨？文脈からして人名だろうが、美乃と似ているって事だろうか。

ブル。

美乃が二人。何ソレ世界の終わり？俺まだ死にたくない。いやいや無いでしょうさすがにこんな人格持つ人間が二人もいるなんてまさかそんなええええ…。

「聖志君、どうかした？」

「ごめんなさい美乃さんほんとすんませんいでだからその手を放して下さいいだだ」

「何故か突発的に人間の頬の伸縮性の限界が知りたくなって」

自分で試せ。

とは言えないので（相手は美乃様だぜ？）赤くなった頬を押さえて蹲る。

勿論次に来るであろう第二撃の予防である。

美乃は一回で攻撃の手を止めたりしない。二回三回と追い打ちを掛けるタイプだ。
…ピンヒールでつま先抉られた時は死ぬかと思ったなぁ…。
良かったここ学校で。美乃の比較的害の無さそうな靴を見ながら初めてそう思った。

「それで先生、ご用件はそれだけですか？」

「ん？あー…実はな、お前らにさっきの質問したところでどうせ『違いますよ』か『あいぞめがんぐって何ですか』って答えしか返ってこないだろうから、よしじゃあ証明してやるついて来いっつって目の前の教室に連れ込んでいっちょ尋問してみますかーってつもりだったんだがよぉ」

さらっと凄ぇ事言ったぞ今。

「まさかあっさり肯定するとはなぁ……俺の計画水の泡じゃねぇか」

知るか。

「じゃ、もう帰って良いですか」

美乃…どこまでもマイペースだな。

「ああん？…おーい待て待て。いやぁ、この部屋ん中、拷問手伝って貰おうと人呼んであるんだって。お前らここで返したら俺の立つ瀬ねぇじゃん。な、俺の顔立ててくれよ」

尋問からグレードアップ。そしてその言葉の意味は黙って拷問され

ろと。

「先生の都合じゃないですか。私関係無いですし」

「おいおい待て待て。ほら、知りたくねぇ？何でお前らの正体分かったかとか」

「知りたくないと言えば嘘になりますがそれ程大きな興味も無いです。ではこれで」

「待てって。ちょっと付き合うだけで良いからよぉ」

「拷問に？」

「いやいや、アレ冗談。ジョーダンだって。そう警戒しなさんな。オイほら唯里、お前もずっとしゃがんでないで説得しろよカノジョ」

今、今何かおおお恐ろしい言葉が聞こえたような。

「カノジョじゃねぇの？」

「違っ「そーですカレカノです今からデートです。邪魔しないでね、先生」……ウン。ソウソウ。デートダカラ、俺達行クワ。ソレジャ」

美乃さん……怖い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5246u/

とある引きこもりの学園生活。

2011年10月29日22時20分発行